

シリーズ「環境問題として考える子どもの遊び」第2弾・人と人との関係性から探る
『人がつながる場所のつくりかた』

日時:2018.9.14(金) 19:00-21:00

会場:国立オリンピック記念青少年総合センター

登壇者:NPO 法人ハンズオン埼玉理事 西川正

NPO 法人せたがや子育てネット代表 松田妙子

一般社団法人 TOKYO PLAY 代表理事 嶋村仁志

<タイムライン>

1. あいさつ(嶋村仁志)
2. 「遊びの環境をめぐる人と人との関係性は、どうなっているの？遊びの生まれる場所のあり方とは？」(西川正)
3. 「おでかけひろばぶりっじ@roka」活動内容(松田妙子)
4. トークセッション「遊びの生まれる場所をつくるために」(西川・松田・嶋村)
5. 会場参加者同士のやりとり(嶋村・西川・松田)

2. 「遊びの環境をめぐる人と人との関係性は、どうなっているの？

遊びの生まれる場所のあり方とは？」(西川正)

自己紹介

西川と申します。ひとりで話すだけだと人が集まらないと思ったので、松田妙子さん呼びました。松田さんの前座ということでよろしくおねがいいたします。(笑)

NPO 法人ハンズオン埼玉の理事、地元の 39 箇所の学童を運営する NPO 法人の理事などしており、市民活動と地域の活動の両方を埼玉県内でやっています。

この他、いくつかの大学の講師などもしています。「公共施設の研究」、「動員の研究」、地域活動が負担に感じるという課題から「焼き芋の研究」、「路上遊びの研究家」もやっています。そして、「禁止の看板」集め等いろいろやりました。

親になって感じたこと

20 代の頃は、学童保育の指導員をやっていて、助け合う父母たちと運営をともに悩み、ともに動くことを、感じていました。



そして 10 年後、親になって保育園で体験したのは「焼きそば、ダメ。花火もダメ。保護者のみなさんは、何もしないで、お子さんとゆっくり過ごしてください。保育士が全部やりますから」と、保育士さんはコマネズミのように走り回るばかりの状況で、「なぜ??？」と思うばかり。

保育園に迎えに行くと、子どもがした小さなケガについて保育士さんが保護者に謝ります。そんな状況に疑問を感じるばかりでした。保護者からは、様々な苦情が寄せられて、「苦情ばかりが出るのはなぜだろう」「どうしたらいい?」と考えるようになりました。

「禁止」する人が嫌がっているもの

「おとうさんのヤキイモタイム」というキャンペーンをやっています。焚き火が禁止される理由は、苦情です。「焚火で煙出る>近隣の面識のない人が迷惑を感じて役所に苦情の連絡>役所が禁止を告げに来る」といった流れになっていると思います。

学校内の施設は学校長が許せば比較的許可がありますが、「何かあったら困るので」派の先生だとできません。この「何か」の中身は、「事故」と「苦情」です。

先日、住んでいる公団の団地に「ベランダの音にご注意:ベランダでの『すだれ』や『よしず』がぶつかる音、風鈴等の音、携帯電話での会話は他の人にとっては心地よいものではありません。ご配慮をお願いします」の張り紙が掲示板に貼られていました。風鈴の音が……!

直接話さない社会

遊べない社会になっている理由は、上記の苦情→禁止という流れ＝制度化と、サービス産業化だと思います。ある、大型ショッピングセンターの中にある有料の遊び場を見てみると、それぞれの親子が他の誰とも交流をすることなく遊んでいる光景に出会います。

保育は 20 年ほど前から、「サービス」になっています。保護者もそれを求めます。しかし、「サービス」のお客さんでいると、保護者同士はつながらず孤立します。子ども同士のトラブルがあっても、コミュニケーションの中で折り合いをつけられないので、すぐに先生や役所に訴えるということになり、「お互い様」ということですまなくなってきました。

最近、学童保育で保護者向けに作成しているレターに、「ぶつかり合いながら育つ子どものこと」を解説した漫画を掲載しました。子どもにとっては葛藤の時間こそが成長の糧です、ということを訴える漫画です。トラブルを起こしてほしくない保護者とその意をくんで禁止をする先生、という構図の中では、人は育ちません。

その「サービス」本当にいいですか？

「サービスを買う」とはどういうことか。それは、個人がシステムに頼って暮らすこと、そして迷惑をかけないようにと一人でがんばり、逆に迷惑をかけられると過剰に反応するということになります。「サービスは孤立を解消しない」ということに、私たちは気づくべきではないかと思います。あくまでサービスは「入口」。では「出口」は何なのでしょう。私は、家族だけの子育て・暮らしをかえていくことだと思っています。

子育て支援の NPO を長く運営してきた友人は、「20 年前はじめたばかりのころ、子育てサロンの座布団はスタッフが事前に準備するのではなく、早めに来た利用者が出していました。今は、スタッフがきちんと用意して「さあ、どうぞ」となっていて、それでいいのだろうか、話していました。

『放っておくと自然にバラバラになる暮らしだから、「一緒」をどうやって作れるか』、このことをどう考えるかを議論したいと思います。一緒にはとてもめんどくさいこと、わずらわしいことですが、それでは自由もまたないのではないのでしょうか。

実は、本日のこの講座は、「気まづくなれる場所のつくりかた」が最初のタイトル案でした。このタイトルのままでみなさんは来てくれたでしょうか。そこで、(チコちゃんに叱られる風に)「今こそ松田妙子に問う。“人がつながる場所のつくり方って何?..”(笑)

3. 「おでかけひろばぶりっじ@roka」活動内容(松田妙子)

おでかけひろばぶりっじ@roka のこと

産前産後のお母さんたちを対象にした、「おでかけひろばぶりっじ@roka(以下では“ひろば”と略記)」という場所を、芦花公園近くの建替えられた公団住宅の中でやっています。

(写真)毎年、ゴーヤを作っています。団地の中にある「お花を植える会」があって、夏休み中もみんなが水をやってくれます。いろいろな方々が水やりをしてくれるので、水をやりすぎになっているかもしれない、うれしいところです。



団地の中には東屋があって、ここで、去年も 10 月 1 日の『とうきょうプレイデー』では、七輪を出して楽しみました。

もともと、とても静かなところで、買い物帰りの歩く方のレジ袋のカサカサという音しか聞こえてこ

ないくらいでした。少しずつ子育て家族などの新しい方が入ってきて、団地の中に立ち話を増やしたいと思って7年前にここで事業を始めました。

現在の活動は、世田谷区の地域子育て支援事業として、自由度が高い補助金での支援にこだわってやってきています。請負というやり方もありますが、仕様書で実施することが細かく決められてしまう。そこで私たちは請負ではいけないと考え、補助金でやってきました。

「授乳スペースはどこですか？」と聞かれたら……

私は「自分の子を自分で見ましよう」の『呪い』から離れて欲しい気持ちが強くて、みんなで見合えばいいじゃない、ということでやっています。そんな狭い場所で、「授乳スペースはどこですか？」とお母さんから聞かれたことがあって、「どこで授乳したいですか」って応えちゃうんです。どこでしたいか自分で見つけたらよいのでは、と思うんです。狭いところだから、そんなに場所があるわけではないのだけど、そこでしてくださいと決められるのではなく、周りの人に聞いて、自分がよいところを見つけてもらいたいです。

建物の外には、乳幼児の乗り物があります。最近では、子どもがひとりの家庭が多いためか、不要になった乗り物も傷みが少なく、このうちキャラクターが付いた乗り物は、人気が多くもめる種になることがあります。そこで折り合いをつけていくのがまた面白いと思っています。午後3時に広場は閉まるのですが、遊びたい人は遊んでいくことができるようになっています。

人が繋がっていくための、場づくり

最近では、砂遊びグッズがないと外で遊んでもらえないので、まずはきっかけになれば、と思ってそれも置いています。一方、ひろばの中では、おもちゃの棚の内側でしみじみ溜まります。なぜか、狭いその場所に人が集まります。

ひろばには、運営のプログラムのようなものはあるけれど、基本は自由に過ごしたり遊ぶことが良いと思っています。中には、ひろばの端っこで、お母さんから離れて子どもが自分のペースで遊ぶことができる時間の保障も必要だと思っています。

お母さんが、自分の子どもを見ていると、いろいろと言っちゃったり、手を出したりして、子どもが遊べないと思います。だから、親だけで話が盛り上がっている空間も重要だと思います。

他にも、昔来ていて、子どもが成長して居づらくなってしまった親のために「ちょっと大きめさんの会」という場を設けて、水を使わないパン作りを企画したりしています。お母さんたちが仲よくなるきっかけは、このようなパン作りのような機会があるようです。

また、男性が近づきやすい環境をつくるために、機械いじりが得意なおじさんたちによる、「おもちゃの診療所」というのもやっています。最近では壊れるほど古いおもちゃがあまりなく、暇になったら困

るので、包丁研ぎも一緒にセットに企画して団地のシニアの方々に来てもらえるよう、工夫しています。

(動画)ひろばでは、子どものケンカを安易に”止めさせない”ようにするために、見ていられる親が増えるような環境をつくり出したいと思っています。子ども同士のおもちゃの取り合いがあった時に、安全確保だけして、できるだけケンカを止めなかったら、その後の子どもたちは、次に気持ちを切り替えることができ、他の遊びを始めたということがありました。

このほか、中学生の授業に赤ちゃんに触れ合う機会をつくろうと、ひろばからお母さんの協力をもらって学校へ出かけています。

また、子ども食堂はやってないですが、食事会をしています。参加者だったお父さんが、コーヒーを淹れ始めて、今では抹茶もふるまってくれるようになりました。

外でのたき火も通常禁止されているけど、「防災訓練」にしたなら、近隣の全世帯にチラシ配って実現することができ、煙が出て大丈夫になりました。集会室では、第二土曜日にプラレールで遊べる場をやっています。防災イベントや食事会で、何度かかかわった親同士のつながりになってきています。

4. トークセッション「遊びの生まれる場所をつくるために」(西川・松田・嶋村)

「～していいですか？」の背後にある呪い

西川:まず、松田さんのお話にあった「どうして授乳の場所を決めてないの？」。

松田:まずは建物が狭いことも理由にあるかもしれないです。でも私は、好きな場所でしたいと思うから、自分で見つけてほしいと思います。いろいろな場所で、「子連れはここ行け」みたいに、決められすぎていて、違和感があったのでこういう活動始めたみたいなどころはあります。「ここぴったりだな」と思う場所を自分が決められるようになってほしい。だから、許可がないと心地よくなれないのって、好きではないんですね。

西川:プレーパーク(冒険遊び場)にいと、子どもが「木に登っていいですか？」と聞いてくると、同じですね。

松田:誰かに許可を受けるのではなく自分の思いで行動できるような、自分の場所にしてほしいと思っています。スタッフに聞くということは、自分の場所になっていないということだと思います。周りの人に聞いてみましょうよ、と言いたいところです。

嶋村:松田さんは全国でお話しされる機会があると聞きます。ほかの場所では、松田さんのような考え方は、やはり当たり前ではなかったりするのでしょうか。感覚的に松田さんのような考え

の方は、全国の何割程度と感じますか。

松田：日本酒をつくっている人から、「善玉菌は数が少ないと死滅する」って聞いたことがあります。だから、私はよいと思うことは、実行していかないと死滅すると困るので、このような考えを話して回っています。

まず、子育てに関する施設に「自分の子どもは自分で見ましょう」というルールや貼り紙がある。これは、『呪い』だと思っんです。このことは、いろいろなところで話しています。



この『呪い』があると、私はとてもモヤモヤするんです。スタッフの方も、意外とふつうに「指示」しちやったりしているし、来ている人も、場を管理する人に許可とったり、確認する文化が嫌だなあ、と感じています。例えば、昔働いていたところでは「スタッフさん、あそこでケンカしている子どもがいます！」って報告してくる親もいたりしました。

実はみんな、サービス疲れしている？！

嶋村：たしかに、ルールが決まっている方が楽だという人は多いと思います。サービス提供や、それに対してクレームを発するほうが楽だという感覚が圧倒的に多数だということはわかるけど、その感覚からどうやったら抜け出すことができるのでしょうか。

西川：コンビニやショッピングモールは私もよく利用します。誰とも話をしないで買い物できるのは、楽で便利という一面があるという点は理解します。いつもの同じ店員さんに「次は何買うの？」とか言われると、面倒くさいなとも思います。でも、それだけになるのは、少し寂しい気がします。「誰でもよい」という関係ですから。

埼玉県のご家庭の子どもは、土日のお休みは、ショッピングセンターに家族と一緒に行く。このこと自体はよいけれど、せめてどちらか一日でも他の家族と友達や異年齢の子どもと交わって遊ぶことも必要だと思います。

さまざまな親たちとかかわっていると、最初から正解のないものと向き合うのがとても苦手になってきている、と感じます。学童でも保護者会の主催でキャンプに行ったりしますが、近年、強い負担感を感じる保護者が増えてきています。そこで、備品一覧、スケジュール、子どものかかわり方、等々を記した 37 ページもあるガイドラインを作って配ったら、保護者から感謝されました。考えるべき項目がクリアになったとのことでした。答えがないから遊びになるのですが、そのことに不安が先に立つ保護者が多いです。答えのない部分（話し合って決める部分）をちゃんと残しながら、方向性を示したり、サポートをしたりすることを運営者の側は考えないといけないようになってきています。10 年前くらいの保護者は、同じようなことをしたら、「勝手に決めるな、自由にやらせろ」と怒っていたんですけどね。

松田: その通りだと思います。ひろばでご飯を一緒に食べていて、参加していたお母さんの子どもがごはんこぼした時、「すみませーん、こぼしちゃいました」って言って来たので、私は「ほんとだー、雑巾あそこだよー」って応えました。あとから考えると、あの発言の意図は「拭いてください」って意味だったのだろうか…。とっさに出た私の対応が、意地悪だったのかもしれないです。その時は、他のお母さんがサポートしてくれていたけども、とにかく、周囲の反応が、その人のスタンスをカタチ作っていくことって、けっこうあると思います。

嶋村: そんなことが広がる環境をつくるには、どうすればよいのでしょうか？西川さん、焼き芋の会は、なぜ、埼玉県レベルに広げたのですか。

西川: やきいものとき、お芋を運営者がすべて提供したら、大きさとかが焼き具合だとか参加者から様々な苦情がでて大変でした。そこで、参加者の持ち寄りにして、自分たちで焼くようにしたら、苦情はなくなりました。遊びになったんですね。楽しかったという声を聞いていると、実はサービスに疲れている人も多いのではないかと思います。

京都大学の先生で「不便益」の研究している人がいます。不便な方が、人がつながる。人が仲良くなると。

私の経験では、その一番のきっかけは「トラブル」。トラブルがおこると、みんなが一気に「当事者」になって、会話が始まります。そういう「イレギュラー→あそび」を保障できる余裕がある環境を作ることが場づくりのポイントなのではないかと思います。



「自立」の捉え方を変えよう

松田: 困ったときに、「困った」と言うことができる方が、そこにいるみんなが気にするのだと思います。防災イベントを行った時に、カセットガスの発電機が動かなかったことがありました。私が「できなーい」と言ったところ、その困ったことを共有するみんなが助けてくれて、そのあと、人と人との関係ができました。

夏前になると、ひろばでは「水遊び」があります。慣れていない親たちは、今日の「水遊び」は何時からかしらと、様子をうかがっています。意地悪な私は、それを気付いていても運営側からはやりません。したい人がいれば水遊びを始めたらいいと思います。主催者からやっていくのではなく、踏み込んでいけるような空気をつくっていきたいです。

西川: 「自立する」「人の世話にならない」「人に迷惑をかけない」ということを教えられてきた 80 年代以降の親たちは、しんどいと思います。困ったことを増やすことができないのだと思います。

そういう世代が背負っているある種の『呪い』は大きいです。いま、大人も含めて、漠然とした人に対する信頼を取り戻すということが必要じゃないかと思います。

以前、娘の通っていた学童のお迎えにいくと、他の親たちと積極的にかかわることがなかったあるお母さんがカギをなくし、そこにいた大人も子どももみんなで30分以上カギを探したんです。その日以降、そのお母さんの人柄がゆるくなるということがありました。そんなきっかけになるような機会が必要なのだと思います。

嶋村: 失敗した時に誰かにやさしくしてもらった、助けてもらったという原体験は、大人になってからも必要だということなんでしょうね。

西川: 人間が一番弱い時といえば、子どもを産む前後。だからその時期に、誰かが関わるのが大事なのだと思います。チャンスです。思春期の時も同様に、メンタルがしんどい時期にこそ人との関わりが必要なんだと思います。

松田: 産前産後のお母さんに、「頼ってもいいよ」と言いたのだけど、受け入れられることは少ないです。最近、中学3年生に赤ちゃんを会わせにいく授業の中で、中学生に「子育ては、頼ってやらないとできない」ということを伝えていると、後ろで聞いているお母さんが泣いているということがありました。次の世代に伝えるように見せかけて、間接的にいまの親世代に伝わるということもあります。対象の人たちにダイレクトに言うのではなく。

西川: そう、ダイレクトに伝えると、「答え」になってしまいます。その答えがあると、「自分はできていない」と不安になる人が増えてしまうんですね。だから、「焼き芋しましょう!」と表現して、「仲良くなりましょう」といった直接的な表現で言わないようにします。結果として仲良くなればいいだけのことなのだと思います。

嶋村: この時代の『呪い』とは何かをみなさんに聞いてみたい気がします。そして、その『呪い』を解く魔法のようなものはないのでしょうか。

松田: 西川さんの「コンビニで声かける運動」で店員さんに話しかけるというのを試したことがあります。本屋のレジで店員さんの名札を見て、「何て読むんですか」「ご出身はどちらですか」などと聞いてみるのです。このように、誰もが気軽に試せるような方法があるといいと思います。

西川: 「本音ぼろり運動」ですね。知人のダンサーの新井英夫さんとチェーンのカフェに行ったときに、マニュアル通りの商品紹介をされたので、新井さんがそのスタッフの名札を見て、「〇〇さんはどっちがおいしいと思うんですか?」と聞いたんですね。そうすると、「私は・・・」と自分が主語になり、店員とお客という立場から、一瞬にして人と人の関係に戻って感じにかわったんです。(『あそびの生まれる場所』西川正著あとがき参照)

5. 会場参加者同士のやりとり（嶋村・西川・松田・25分）

嶋村:では、みなさんにもグループで話をさせていただきたいと思います。今、みなさんが感じているこの社会の『呪い』とは何かをテーマに話をしてください。

そして、その『呪い』を解く魔法のようなものはないのかも話してみてください。



(参加者からご意見)

参加者(保育士):

「おせっかいは、余計なお世話」って、思われちゃうから言えない。だから、電車の中で赤ちゃんを笑わせるようなことも、気が引けてしまいます。そして、もうひとつ、「価値観の押し付けをしない、という価値観を押し付ける」というのも『呪い』だと思います。

参加者(プレイワーカー):

生きていて当たり前を考えていること(よかれと思ってあるものも)も『呪い』になる。たとえば、「仲良くしなければならない」「自立しなければならない」「みんなと一緒に安心」。また、同じグループの看護師さんからは、人は、赤ちゃんから成長してできることが増える時や、年老いてできることが減るときに、助けを必要とするのだと思うけど、現代はそのケアが周りの人との関係ではなくて、サービス・お金になってしまっていて悲しい、という意見がありました。

参加者(遊び場運営):

お世話を送る「恩送り」というのが良いと思って、広めています。もらったものは誰かに返す。それが広がっていくと、誰に送ろうかと、『呪い』を解く「魔法」にもつながるのではないのでしょうか。

参加者(公園管理):

普段は呪いだらけの場所で仕事をしています(笑)。「暗くなったら、子どもを帰さないといけない」「たき火は迷惑にならないように煙を出さないよう自粛」「考えない、どうしたらよい、どこまですればよい、指示待ち」の呪いがあります。これに対しては、どうすればよいか、考える機会があることが『呪い』を解ききっかけになるのではと思います。

参加者(区議会議員):

「人との比較」「評価されること」「効率合理性」「責任を誰がとるのか」「私はこうしたい」という思いが、『呪い』になっていると思います。

(アフタートーク)

松田: 指示待ち、指示してくれる仲間の両方がいると楽になるかもしれません。その両方の人がいることで、ちがう景色が見えたらうれしいです。でも、私としては、予定調和はつまらないですね。

西川: 価値観の話になりますが、昔はいろんな人がそもそも関わっていて、変なおじいちゃんが価値観押し付けてきても、別のところに行けばよかった。つまり個々人がどう関わるかなんてあまり気にしなくてもよかったのかもしれないです。でもそれが、教育社会になって、先生が答えを持ち、正しいかどうかを評価する人ばかりが子どものまわりにいるようになった。いろんな見方があったものが、そうでなくなってきました。サービス社会になって居場所が分断されていくことで、身動きが取れなくなっていったのではないのでしょうか。

でも、大切なのは、やはり丁寧にコミュニケーションを重ねていく中で、折り合いをつけていくということの積み重ねなんだと思います。それが、「公共が発生する」ということなんだと思います。どうやったらルールを減らしていけるか(自分たちでルールをつくりかえていけるか)っていうのが、ポイントだと思います。たき火は人が声を掛けやすくする道具の一つです。そういうごちゃごちゃとしたコミュニケーションの発生をしかけるために、TOKYO PLAY は『みちあそび』とかやっているのですよね。

嶋村: そうですね。ご近所の他人同士が出会い、コミュニケーションをするきっかけとしての「みちあそび」があると考えています。話は変わりますが、「遊びは、未知との遭遇なのよ。予定された学びしかない習い事よりも大切」と、以前テレビの仕事で一緒した尾木ママが話していたことがあります。遊びの中では、突発的に何かが起こり、それを面白く解決していく機会にあふれています。そういう感覚を持って育てることが、人として大事なんですよね。そう考えると、子どもがやりたいことができない、言いたいことが言えない世の中は、結局、危険だと思うんです。そういうもののためにも、遊ぶということが守れる大切さというものがあると思います。



<<おわり>>